

THE ULiCS TIMES

2021年10月神戸大学附属図書館学生チームULiCS <https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/>

2021.10.vol.10

リニューアルした保健科学 図書室へ見学に行きました！

2021年9月、私たちULiCSメンバーは、神戸大学名谷キャンパスにある保健科学図書室を見学した。新型コロナウイルスの流行以降、対面での活動は2021年7月の定例会以来2回目となる。感染対策のためメンバーをふたつの日程に分けて少人数で見学したのだが、1年以上オンラインでしか活動することができなかった2回生のメンバーと初めて会うことができたのは非常に嬉しいことであった。



今回訪れた保健科学図書室は、2021年4月にリニューアルオープンした。保健科学図書室の職員によれば、これまでは2階から入館する形だったのだが、リニューアルする際に食堂の向かい側の1階に入口を設けたのだという。以前は1階に複数の部屋があったそうだが、現在はひとつの大きな空間となっている。明るい色の木材が利用された1階は新しく、おしゃれで美しかった。ラーニングコモンズやグループ学習室も、新しくきれいな机やいすがあり、勉強が楽しくなるような空間であった。一方、2階はきれいに改修したが、空間の配置としては以前と大きく変更した部分はないそうだ。並んだ本棚に医学関連の書籍が多く並んでいるのも、保健科学図書室の特徴だろう。また、文庫本も多くあり、医学以外の分野の書籍もそろっていた。2階にはたくさんの座席があるので、自習したい学生の役に立つことだろう。

神戸市営地下鉄名谷駅から保健科学図書室までは徒歩15分ほどである。館内では職員の方に説明をしていただいたり、神戸大学附属図書館のマスコットキャラクターであるうりこのぬいぐるみの写真を撮ったりと楽しい時間を過ごすことができた。オンライン授業が多く、まだ神戸大学のキャンパスや図書館にあまり来ることができていない1回生や2回生にとっても、この図書館ツアーが良い経験となってくれば嬉しい。これからも感染対策に気を付け、メンバーや職員の方々と今できるULiCSの活動を模索していきたい。

(文学部4年 岸本)



1 F



入ってすぐ右手にあるひな壇横の棚には、読み聞かせ等に使用する大型絵本が展示されている。これまで蔵書候補として保管していたが、リニューアルを機に展示することにしたものだ。

ラーニングコモンズ入口には、壁伝いに作られた本棚のアーチがある。今回の改装で新設された設備とのことで、ほとんど埋まっていなかったが、非常におしゃれだった。ちなみに裏も同様となっている。これから、様々な本で埋まっていくのが楽しみだ。

大型本のコーナーには、各種国家資格試験の参考書・過去問題一式や関連法令集が揃っている。また、ラーニングコモンズの両端には、医療雑誌や新聞のバックナンバーが積まれた棚があり、購読中の医療雑誌はポップな色や写真でデザインされた表紙が多く、思わず手に取ってしまうほど可愛いらしかった。

グループ学習室は、現在使用不可とのことだが、大きな窓を備え、明るく清潔な印象を感じさせ一室となっていた。



▲カウンター

ラーニングコモンズ▶

2 F



2階に上がると、両側に本棚が並んでおり、奥には窓に面した自習席が数十席ほど設けられている。六甲台キャンパスにある図書館と比較すると、規模は小さいが、外に面した窓の面積が大きくとられている分、明るい。外は木々がちょうどよい間隔で植えられており、丸見えではないのでご安心を。検索用端末の向かいには「ナイチンゲール像」が設置されており、学生を静かに見守っていたのが印象的だった。

本棚を詳しくみると、臨床医学と看護学についての本が半分以上を占め、残りの大多数が外科学など医学関連書籍で構成されていた。医学というと疾病の研究や専門性を極めるイメージだが、どちらかというところ検査・対処の方法や様々な病気に対応した患者のケアといった「現場での知識・技術」の習得に比重を置いていると感じた。試しに手ごろな本を開いてみると、分かりやすい図や絵が多数載せられており、普段から文字しかない教科書を使用している私には新鮮だった。手塚治虫『ブラックジャック』、鈴ノ木ユウ『コウノドリ』など医療や命の尊さを題材にした漫画作品や、最近の小説や古典文学もそろっており、多忙な学生の息抜きとなっているのだろうかと推察した。



◀ナイチンゲール像

▼自習席。窓からは自然光が差し込む



まとめ

書棚を見て回っていた際、ウイルスや感染症学といったホットな話題の専門書を見つけ、ドキリとした。コロナ禍によって現場の医療従事者の状況や待遇の改善が問題となった。この学科を卒業する学生も、ゆくゆくは医療の最前線に立って、患者の一番側で回復を支える存在になる。心身が窮地に陥った私たちに寄り添い、救うために、正確な臨床知識と献身的な精神を身に付けることは並大抵のことではないのだ。

今回の見学を通じて、いかに医学部保健学科が社会にとって重要な学科であるか、学生たちがその要請や期待に応えようとしているのかが感じられた。そして、この図書館がそのような学生の志を支援する役割を果たしていることを実感した。コロナ禍だったからこそ、より一層際立ったのかもしれない。

今回は、遠く離れたキャンパスを訪れる機会であることはもとより、他学部への尊敬が養われた良い機会だった。もし立ち寄ることがあったら、ぜひ覗いてみてほしい。

(余談だが、私は『ブラックジャック』の大ファンで、内心ワクワクしていたのは秘密だ)

(法学部4年 水田成美)



書評 BOOK REVIEWS

※各担当者による執筆のため、
文体が異なります。



私たちに 見えない もの

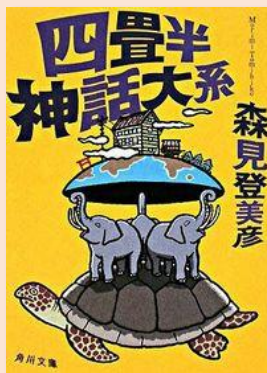
この女/森絵都/
筑摩書房/2011

大阪の釜ヶ崎で日雇い労働者として働く24歳の甲坂礼司は、神戸大学の学生、藤谷大輔と出会い、小説を書く課題を代わりにやってほしいと頼まれる。彼の小説は教授から絶賛され、彼のもとに執筆の依頼が舞い込む。依頼主はホテルチェーンの社長、二谷啓太で、彼の妻、二谷結子を主人公にした小説を書いてほしいということだった。早速彼女に取材を始める礼司だったが、彼女に深く入り込むことは難しく、執筆は進まない。そんな中で、礼司は企業同士の競争に巻き込まれていく。

釜ヶ崎は現在はいりん地区と呼ばれている、日雇い労働者やホームレスの人々が多く暮らしている町である。冬は凍死者が道に横たわっていることも当たり前であるこの町で、人々は死と隣り合わせのその日暮らしをしている。この小説では、釜ヶ崎の厳しい現状や、その中でも助け合って生きる人々の温かさが描かれている。彼らは私たちの日常とは切り離された存在であり、私たちが自ら知ろうとしなければ、彼らについて知ることはできない。こうした私たちから忘れ去られた人々が企業の無慈悲な戦略によって危機にさらされることに作者は警鐘を鳴らしている。

この小説は阪神淡路大震災の前日で終わりを迎える。その後、主人公たちに何が起こったのかは、冒頭で少し述べられているだけで、あとは私たちの想像にゆだねられている。日雇い労働者の苦しさや、震災の残酷さについて考えさせられる一冊である。釜ヶ崎とともに神戸も舞台になっているので、この物語をより身近に感じられると思う。ぜひ手に取ってみてほしい。

文学部1年 沖



薔薇色の キャンパス ライフ

四畳半神話大系/森見登美彦/
株式会社KADOKAWA/2008

突然だが、大学にどんな期待や夢を抱いて入学しただろうか。興味のある勉強をする、恋人を作る、サークルや部活に一生懸命になる、留学や旅行をするなど、数えたらきりがないだろう。「健全な交際、学問への精進、肉体の鍛錬など、社会的有為の人材となるための布石の数々を打ち、薔薇色のキャンパスライフを送る」（『四畳半神話大系』の表現を一部引用）。これは、大学1回生の多くが希望する大学生活というものではないか。しかし現実には、なかなかうまくいかないものだ。

『四畳半神話大系』の主人公である「私」は、大学に入学後、大学での面白い未来を切り開こうとサークルに入るも、唾棄すべき悪友である小津に翻弄されながら、薔薇色のキャンパスライフどころか、恋人もおらず、留年したり、サークルから追放されたりと不本意な大学生活を送る。そして現状に不満たらたである彼は、「もしあのサークルに入らなければ、小津に出会わなければ、私のキャンパスライフはもっと違ったものになっていたはずだ。」というのだ。しかしながら、この主人公は不満を抱えつつも、無為な大学生活を誰よりも楽しんでいるように見受けられる。映画サークルでは、サークルの先輩の暴露話を上映し逃亡を図ったり、同じ下鴨幽水荘に住む樋口師匠の弟子になったときは、「自虐的代理戦争」なるものに参加したりと、そのときそのときにおいて無為なことであっても全力で楽しんでいる。

ちなみに、『四畳半神話大系』では、それぞれ異なるサークルに入る平行世界での話4篇からなるオムニバス形式がとられている。なお、アニメ版では、小説版では入っていないサークルに入っ場合の平行世界も描かれている。

さて、コロナ禍ということもあり、制限も多いため、現状に不満がある学生も多いことだろう。しかし、それでも今の生活を可能な限り楽しむことで結果的に自分なりの「薔薇色のキャンパスライフ」を送ることができるのではないだろうか。

法学部1年 たまごがかり



私たちはなぜ レイシズムに 向き合えないのか？

ホワイ・フラジリティ 私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか？/ロビン・ディアンジェロ/貴堂嘉之 監訳/上田勢子 訳/明石書店/2021

この本はアメリカの人種差別に関して、白人の心の脆さ、ホワイ・フラジリティについて述べた本である。これは白人が人種差別や人種問題に向き合うことができず、自身の言動について他者から人種差別性を指摘されたときに様々な自己防衛反応を起こし、謝罪や能動的な学習から逃避することを意味する。怒り、怖れ、罪悪感といった感情や、論争、沈黙、ストレスを感じるその場からの撤退といった行動が反応として起こる。

本書をざっくりと要約すると以下ようになる。

- ・黒人は歴史的に政治、司法、教育、労働などあらゆる分野で組織的、制度的な差別を受けてきており、白人は黒人でないという理由で人種差別から特権的な利益を得ている。

- ・白人による人種差別は社会的、制度的なものであり、いくら白人個人が特別な経験やルーツを持っても、レイシズムから目を逸らすことが認められることを意味しないし、それはレイシズムを強固にする。

- ・たとえ人種を見ずに人格の中身を見ようとしても、人種差別を回避しようとしても、非白人が白人と異なる体験をさせられているという現実が変わるわけではない。

- ・リベラルを自認する白人であっても、人種を直接持ち出さずに人種を軽蔑した言動をとっている。

本書はアメリカで書かれた本なので白人の非白人に対する人種差別について分析されているが、日本にも同じことが言えると考えられる。なぜなら日本でも外国人に対する偏見や差別が横行しているからである。警察官の職務質問に頻繁に遭わされることや賃貸住宅を借りる際に拒否されること、NHKがBLM運動を報道する際に黒人に対するステレオタイプなCGを使用したこと、入管でたくさんの外国人が長期収容され20年で20人以上が亡くなっていること、そしてこれらの事件の報道に対して危害を被った外国人を批判する日本人が大勢いることがその証拠である。この本は白人だけの問題ではなく、日本人である私たちも読むべき本である。

工学部 1 年 米谷



世界初の “ネコ心理学者” が贈るネコ研究の 苦勞譚

知りたい！ネコごころ/
高木佐保/岩波書店/2020

「ネコだって、思い出にふける。」

「ネコだって、推理ができる。」

“ネコごころ”を世界で初めて科学的に明らかにした研究は、2017年度京都大学総長賞を受賞しました。本著は、自由に気ままなネコたちを対象に研究することがどれほど大変だったのか、その苦勞を綴った一冊です。

約1万年前の化石に、ネコとヒトが共に埋葬されたものが発見されています。ヒトとの関わりが深い動物としてイヌを挙げる方は多いかもしれませんが、ネコもイヌ同様、昔からヒトの生活に馴染み深い存在だったのです。ちなみに縄文・弥生時代のネコは、高床倉庫を守るのに一役買っていたと考えられています。皆さんも日本史などで、高床倉庫に「ネズミ返し」がついていたという話は聞いたことがあるかもしれません。

これだけヒトとの緊密な関係にあったイヌとネコですが、ネコについての論文は、イヌについての論文よりも圧倒的に数が少ないのが現状です。その原因は皆さんも直感的にお分かりかもしれませんが、ネコはイヌほど従順ではなく、その自由奔放な振る舞いによって調査・研究が全く成り立たないことが多かったのです。

実験のために場所を移すと、途端に警戒心が強くなってしまいうネコたち。たとえそこに大好きな飼い主がいても、大好きな餌が置いてあっても、彼らは一切動じません。そのため本研究の多くは、営業時間外のカフェや、研究に応じてくれた飼い主の自宅を直接訪問することで行われました。

本著に書かれている結論だけを目にすると、あまり驚くべきものはないかもしれません。「ネコだって、思い出にふける」なんていうのは、ネコを飼っている方なら何となくそうだろうと思っていたことでしょう。しかし、その結論を科学的に証明するまでの過程に費やされた膨大な努力に、とても感心させられます。

ベテランの専門家が執筆することの多い岩波の学術書ですが、本著は29歳（出版時）という非常に若い研究者が書かれています。これからのネコ研究の発展がとても楽しみになる一冊です。

国際人間科学部 2 年 疾風